

バナナの栽培史と世界における農耕の起原

加 茂 儀 一

一 ま え が き

十九世紀の中頃においてさえ、熱帯産の果物は北半球の文明国の人間にとっては、全く口にすることのできない珍果であった。当時太陽の没することなき帝国と豪語していた英国の女王ヴィクトリアでさえマンゴーだけは手に入れることができなかったといわれている。しかし十九世紀の末になって交通機関が発達し、ことに冷凍装置をもつ汽船の発明によって熱帯地方の果物は生のままで赤道を経由して文明国に運ばれるようになった。その結果、熱帯産の果物の需要は次第に高まり、従って文明国におけるその消費量は年々増加している。その中でバナナは文明国人の口に適した結果、その消費量は熱帯植物のなかで一番多く、アメリカ合衆国においてはあらゆる階級を通じて本来の国民的栄養食品の一つとなっている。

ヨーロッパにおけるバナナ市場も年々拡大されており、以前はバナナは乾燥させて移入していたのだが、現在では未熟なままで船に積み込み、航海途上で成熟させる方法が完成されたためより一層バナナの味覚が増大され、その結果バナナに対する需要は従来にも増して次第に高まり、世界市場においてはオレンジと同等の位置を占めようとして

いる。

一方バナナを産出する熱帯或は亜熱帯地方においては、バナナは住民の常食であり、アフリカの多くの地域ではバナナだけを食って生きている土人もいる。またニアンザ地方ではバナナを乾燥させたものを粉にし、それからバナナパンをつくっている。また料理して食用に供している。南太平洋諸島や、中・南部アメリカの住民は、生のまま或は焼いたり煮たりしてバナナを利用して、バナナは彼らにとっては主食の一つである。またアフリカの東部ではバナナを搾って汁をとり、それからブドウ酒に似た爽快な感じを与える飲料がつけられている。

かようにバナナは世界市場から見ても或は未開人の生活上からも重要な役割を果たしている。その上にアフリカの黒人にとっては、バナナの木の幹の髓や若芽は種々に料理される好物として役立ち、汁気の多い茎衣はかまやまだ堅くならない根株もまた食料であり、この植物内の水の貯蔵所になっている葉柄からは飲料水がとれる。南部中国ではその葉はサラダ用として珍重されている。またその大きい葉は小屋の屋根葺きや日傘に役立ち、食物をのせるための皿代りになり、またその葉をとろ火の熱のなかに二、三度徐々に通すと紙のように柔軟性のある白色のものになる。これは例えばマニラ・タバコの運送のときのすぐれた防水包装材料として用いられている。またその茎衣のなかに繊維が含まれこれは非常に古い時代から筵、縄その他の編み細工、あるいは一種の織物をつくる材料になり、火絨ほくちにもなる。またその茎柄から一種の麻がとれるが、これはフィリピンでは所謂マニラ麻を得るために大規模に栽培されている纖維バナナ(学名 *Musa textilis*) から、インドやオセアニアでは本来のバナナ(学名 *Musa sapientum*) から、アンチル諸島、ギアナ、アンゴラではレウリバシヨウ(学名 *Musa paradisiaca*) から、そしてニューサウスウェールズではアビシニアから移入されたバシヨウの一種(学名 *Musa Ensete*) からとられている。

このようにバナナの種類は食料としてのみでなく、各種の用に役立っているが、とりわけバナナが人類にとって重

要なのは食物としてである。すなわち、バナナは未開人にとっての常食であるばかりでなく、前述のように、ますます文明国人にとってもより多く好まれ、従つてその消費量も増加している。然らばバナナの果実が食料として重要な意義をもっているのはいかなる理由によるか、というと、それは勿論バナナの果実が美味でしかも万人向きの味をもち、栄養になるといふことにある。バナナの実は成熟すると、果肉はますます柔かくなり、その澱粉は全く糖分に変化する。およそバナナの実ぐらい小さい面積の割合にそれほど多くの栄養分をもっている植物は他にはないからである。すなわち同じ基面においてバナナの果実はジャガイモの三倍半の栄養分をもち、小麦よりも一五倍の栄養分を含んでいる。そしてバナナは非常に早く成長し、極めて短かい間に豊かな果実を容易にみのらせる。

その上にバナナの果実が人間の食料として有利なのは、バナナの果実に種子がないこと、従つてそれだけその果肉が充実していることである。この点はバナナの果実が食料となるための重要な要素である。しかも皮が容易にむける。事実その果実を食うには何等の道具を必要としない。そして種子がないためにそのまま食うことが出来る。味の上よいに食うのに手間がかからないこと、さらにその上にバナナが多く果実を生むこと、その栽培が熱帯地方では容易であることは、食料としてのバナナの価値を高めるのに大いに役立つ。

二 バナナの果実に種子のないことは、その栽培が非常に古いことを示す

あとで述べるように、バナナの果実は本来種子のないものではなかった。自然における野生のバナナの果実には種子が含まれているが、その種子は少ない性質をもっている。従つてバナナの果実に種子がないことは、人間がこの木を栽培した結果に外ならない。われわれが現在よく食っているナシ、リンゴ、スイカは勿論アンズやセイヨウミザクラの実はが久しい以前から栽培により改良され、しかも経済的にも非常に必要なものであるにもかかわらず、未だにそ

の種子をなくする段階に至っていない。これに反してバナナの果実に種子のないことは、人類によってその栽培が非常に古い時代に始められたことの証拠であって、この前提なくしてはバナナの果実に種子のないことを考えることは出来ない。このことはラインハルトが述べているように、「原始時代におけるバナナの栽培者が果肉の出来る限りの豊富な発育に重点をおいたことの証拠」である。おそらく今日でも彼らの遙か後の子孫であるヴィクトリア・ニアンザやモンブツ地方の黒人にとっても同様に、原始時代の人間にとっても生命の糧であったバナナほど、人間生成の証人としての妥当性を要求する権利をもっている植物は他にはないといつてよい。それほどバナナには遠い昔の地質学的時代や人類の幼年時代の臭いがある。

従ってバナナが幾多の伝説に包まれ、「パラダイスの木」と呼ばれたことは不思議ではない。その学名 *Musa paradisiaca* は、バナナがパラダイスに生育していたという伝説に基づいて命名された。後にはこれはまたその果実がイチジクに似た味をもっているばかりでなく、パラダイスにおいてエホバがアダムに食わせるために与えた「善悪を知る木」と見なされたため、「パラダイスのイチジク」あるいは「アダムのリンゴ」とも呼ばれた。本来のバナナの学名 *Musa sapientum* は、昔インドの賢者 (*sapientes*) がその果実を食って生活していたという伝説によっている。

なおこの学名のうちの属名 *Musa* は、この植物のアラビヤ名が *muz* あるいは *houz* であることからリンネによって属名としてつけられたものであって、この名はすでに十三世紀にアラビヤの医学者イブン・バイタルの書の中に見えている。ヨーロッパでは、西紀前三三〇—三二〇年の間にインドのインダス河流域のパンジャブ地方に進入したアレクサンドロス大王の軍勢のなかの一員がインドにおけるサトウキビと共にバナナの記録を残したのが、最初の記録である。それによると、すでに当時においてインドではバナナの栽培は古いものであった。そしてその果実は土着民の食料になっていたにもかかわらず、大王はこれを不健康な食物と見なし、彼の兵隊に食うことを禁じたといわれて

いる。このことから考えてもインドにおけるバナナの栽培の歴史がかなり古いものであることがわかる。そのことはまたバナナの果実にあたるサンスクリット語としてパラという名があることによってもわかる。バナナという名もこのサンスクリット名に由来している。ローマ時代の博物学者プリニウスも、バナナをポラという名の下にあげているが、これもサンスクリット名のパラから出ている。従ってローマ時代におけるバナナに関する知識はインドに起原をもっていることがわかる。またバナナの果実はマラヤ語ではピサンと呼ばれているが、ドイツ語のバナナの名ピサングはこれからとられている。

以上のことからバナナの栽培が南部アジアに起原を発していることがわかる。しかもその栽培が少なくとも神秘的な時代にはじまったことを想定させる根拠がある。おそらくこの植物は、人類の農耕の原始的な開始と関連があると思われる。その意味においてバナナの栽培の歴史は、人類の農耕の起原の研究にとって、興味のある対象であるといえよう。

本稿においてはこの点の探求を中心にしながら西部アジアに起った穀類を主とする本来の農耕の起原とバナナ栽培との間に何らかの連関がありはしないかを究明したい。

三 バナナの自然史

バナナは最も美しくそして最も優雅な植物形態の一つであって、ヤシと並んで人間の住む熱帯景観の主題をなし、至るところで土着人の小屋の周囲に植えられている。元来この植物は沿岸植物であって、海風の吹く低地を好む。温度と湿度がかなり必要であるが、その他にその大きい葉は風によってすぐ裂かれるので風が強敵であり、従って風をよけた場所を要求することによって新しく出る葉がこのようにして傷けられると、その幹茎は果実を生ずる能力を失って

しまい、開花の前にそれがなお一層ひどくなると開花せず、すでに果実の房がついていても成熟しない。また暴風によって容易に幹が折れる。従って高地によって風から守られていない場所では、根の深い他の樹を防風林としてその附近に植えておかなくてはならない。

またバナナは乾燥を好まないために、乾燥期が長い地域においては、この乾燥期に果実の成熟がおくれ、従ってほとんどその果実だけを食って生きている熱帯地方の多くの場所における住民は、僅かな時期の間バナナの果実を食わないでいることが時々ある。それはその多肉な果実は、たとえ熟さないときにもぎとつても長い間生のままで保存することができないからである。その果実はこのようにすぐ腐り、そしてまた動物のなかにも猿、鳥類のなかではとくにバナナ食イ鳥、リス、野ネズミ、各種の昆虫その他の動物の如く、バナナの果実の好きなものが多い。従って土人はその果実をまだ成熟しないときに採取し、小屋に入れて完全に成熟させるのが普通である。

さて、この種子なしバナナの野生形態は何処に発生したのであろうか。現在バナナに最も似ていて、最古のものとされている野生のものは *Ravenala* 属であつて、これは南アメリカ（ギアナとブラジル）とアフリカのマダガスカル島との隔離した二地域に存在している。従つておそらく *Ravenala* 属の原型ともいふべき形態は、この二つの地域の間の何処かで発生したものであろう。そしてこの原型植物はその消滅前に二つの群に分れ、これらの群は、アメリカとアフリカ・アジアとをつないでいた陸橋が崩壊した後に、それぞれ独立に発展し、一つは新世界の *Heliconia* 属となり、他は旧世界の *Musa*（バショウ）属となり、両者は多数の種類を含んでいる。一方アフリカとマダガスカル島との陸続きが究局に遮断される前に、少なくとも *Ravenala* 属が現存している地域におしやられる前に、この属からそれに近いが、形態学的には著しく進んだ *Strelitzia* が発生した。これは限られた数の種類においてマダガスカルの *Ravenala* の存在している地域に近接する東南アフリカに生育している。ところで *Strelitzia* が、*Ravenala* に対する関係よ

りもアジア的 *Musa* 類がアフリカの *Musa* 類に対する関係の方がより近く、そして *Musa* 類はより後になって初めて *Physocaulis* 亜属 (アフリカにおける) 並びに *Eumusa* (前者と殆んど分離できない *Rhodochlamys* を含む) 亜属として相互に分れたのであろう。

ところで原始的な民族移動と共にアフリカへそして最後にはアメリカの熱帯地方へも到達した一つの栽培形態をアジア的形態群から分離するためには、人間の助けを必要としたのである。ところで人類に栽培バナナを与えたものが何故にアジア的形態群であったか、ということは容易に理解できない。それを理解するには、バショウ属 (バナナ) の内部におけるアジアとアフリカの両形態群をもっと詳しく観察し、明瞭に区別する必要がある。

百年余り前にはアフリカに野生する種子のあるバナナの一種 *Musa Ensete* をバナナの「祖先」とみなすことが、当時の *Musa* 属 (バナナ) に関する自然科学的な知識と一致していたといつてよい。以来アフリカの栽培バナナがこの *Ensete* から系統をひいているということは絶えず推定されたところであるが、しかしこの推定には事実が提供されなくてはならない。

すでにサゴは、一八八七年に *Musa* 属の内での次の三つの群を区別した。(一) *Musa Ensete* 型を含めての巨人バナナ (二) 多肉な果実をもつバナナ、*Musa paradisiaca* 又は *sapientum* (三) 装飾バナナ。この分類は今日まで保持されていて、一八九三年にベーカーはこの三つの群を *Physocaulis*, *Eumusa* 並びに *Rhodochlamys* の三つの亜属として命名した。一方この三つの群のうちで、アフリカの野生バナナを含み、花の構成に非常に原始的な特徴のある第一の群は、アジア・オーストラリア・オセアニア的形態を含む他の二つの群と非常に対立している。

すなわち、*Physocaulis* の場合には、花の構造が他の二つの群とは相違し、果実は比較的小さく、革のように硬く、堅い大きい種子があつて食えない、そして一般に根枝をつくらない。

Eumusa と *Rhodochlamys* はアジア・オーストラリアの形態群であって、花の構造が著しく派生的な形をしているために *Physocaulis* とは異っている。その果実は大抵は柔かく、多肉で小さい種子があり、根枝をつくっている。この二つの群は中間にある推移形態によって *Physocaulis* とよりも相互により密接に結びついている。 *Rhodochlamys* はある程度アジア・オーストラリア的全群の内で極端な形質を示しているにすぎない。それに反してアフリカの亜属である *Physocaulis* は非常に原始的に止まっている一つの系統をなしているといつてよい。

現在アフリカでは *Physocaulis* 群の一二の種類が知られていて、それらはインド洋から大西洋まで並びにアビシニアやナイル河とユーレレ河との間の分水嶺から北部ではカメルン並びに南部ではアンゴラまで分布している。

花の個々の発達においてさえも、アフリカに野生している *Physocaulis* 亜属 (*Ensete* 型) とアジアに生育している *Eumusa-Rhodochlamys* 群との間には根本的な相違が著しく現われている。すなわち、アフリカ群の方がアジア群よりも系統発生的にはより古くそしてより原始的であり、*Ensete* 群の雌花と、栽培バナナである *Musa sapientum* の雌花とは本質的には似ているが、後者は *Eumusa* 群の野生種の雌花と本質的に相違している。このことだけを考えても、栽培バナナの故郷がアフリカであること、従って栽培バナナが *Ensete* (*Physocaulis*) 群の一形態から系統をひいていくことは否定されなくてはならない。しかもこの群の野生種はアフリカでのみ知られているからでもある。

また種子について見ても、花から生ずる果実は *Ensete* の場合には種子の分布を助長する性質を帯びているが、*Eumusa* やその他アフリカに野生する形態群 *Physocaulis* の場合にはかかる性質が全くない。すなわち、後者においては、果実の内には大きくて堅い種子があり、それらは革のように硬いそして食えない殻によって包まれている。それに反して一般に *Eumusa* の場合には果実は比較的大きく、横に長く、柔かで汁気が多く多肉で、その核 (種子) も小さい。従って後者の方が各種の動物にとっては食餌としてはより適していて、動物はその種子をそのまま食って

胃のなかに入れてもち運び、他の場所で排泄するから、それだけこの植物の分布が助長される。

一方また *Rhodochlamys* 亜属は花の構造の上からいって、*Eumusa* の極端に形成された形態である。ことにその花の数が少ないことはこの亜属の注目すべき特質であって、そのために果実の収穫もそれだけ少ない。その結果、果実を食う動物は *Eumusa* 類ほどには *Rhodochlamys* を好まない。このことは著しい食餌需要をもっているより大きい動物についてはとくにいえるのであって、人間のような大食漢の動物にとっては猶さらそうである。

以上のことから、バナナ (*Musa*) のすべての属のうちで、*Eumusa* 亜属の数種類が人間に食用バナナを供給した、ということは当然考えられる。これを根拠にして *Eumusa* 群のそれらの代表者の故郷を探ぐれば、その栽培化が初めて行なわれた場所も判明するであろう。

四 *Eumusa* 種と栽培バナナの原形

Eumusa 種はアジア・オーストラリア・オセアニアの形態群を代表し、その地域は南部中国、セイロン島を含むインド並びにインド・シナ、マラヤ群島、琉球列島、台湾、フィリッピン、セレベス、ニューギニア、ニューカレドニア、タヒチ島までのポリネシヤ群島の一部並びに東北オーストラリアの一部である。

この広汎な地域においては *Musa* の種類は非常に多い。南部中国では汁気のない果実をもつ *Musa lasiocarpa* Franch. と *M. Cavendishii* Lamb. が生育していて、後者はその果実が柔かく美味であるため大量に取引されている。安南、ビルマ、アッサムの一部においてはこの種のバナナが野生状態で土人によって育てられている。コーチンチャイナでは *Musa nana* Lour. *M. Bakeri* Hook. *M. corniculata* Lour. が知られており、最後のものはその果実が赤肉で煮て食うことが出来るので、一種の料理バナナとして利用されている。*M. nana* は中国産の *M. Cavendishii* の変種であって、同様

食用になり、種子なしであるともいわれている。

野生の *Musa* 類の分布の西限にあたるインドでは *Musa paradisiaca* L. だけが二つの亜種 *seminifera* Bak. と *troglo-dytorum* Bak. の形態において出現している。マラヤ群島では種子のある野生の *M. paradisiaca* と *M. troglodytorum* の他に、*M. corniculata* と *M. acuminata* Colla. とが知られていて、後者はニューギニアにまで分布し、非常に美味な果実を生じ、またジャワでは普通にあるが、野生である。

フィリピンでは前述したように、繊維のとれる *M. textilis* Née が存在している。これは一八一一年にインドに移入され、以来その葉柄から所謂マニラ麻がとられている。果実は食えない。その他普通のバナナ *M. paradisiaca* L. の野生形態も出現している。台湾でもその種の亜種 *M. seminifera* Bak. var. *formosana* Warb. が野生している。琉球では *M. basjoo* Lieb. et Zucc. が存在しており、これは日本では芭蕉と呼ばれているもので、九州南部の島々などで栽培されている。ポリネシアにおける唯一の野生バナナは *M. fehi* Vieill. であって、その果実は土人によって料理して利用されている。これはまたニューカレドニアの山地にも存在しているが、その他に *M. discolor* Horan が発見されている。これは栽培によってひろく分布し、赤くて柔かいその果実は食える。オーストラリア大陸の東北部の雨の多い熱帯森林地帯からは *M. Fitzalanii* F. Müll., *M. Hillei* F. Müll., *M. Banksii* F. Müll. が知られているが、最初の二つのものの果実は食えない。

以上に述べた *Eumusa* 類の故郷は、また本質的にはその極端な形態群である *Rhodochlamys* の分布地域をも包含している。そしてそれに属する約一二種類のうち、約半分がインドにあることが知られている。しかしこれらはジャワ以南を出ていないようである。

最も広く分布している普通の栽培バナナは *M. paradisiaca* L. であって、その果実は果物として生のままあるいは野

菜として各種の料理に供されている。そして非常に多くの数の変種や栽培種がすべての熱帯地方の国々に分布している。野菜用バナナ（スペイン語ではプラタノあるいはプランタノ、英語ではプランテイン、その他プランテヤピサンとも呼ばれている）はこの種類の典型であり、一方果物用バナナは亜種 *sapientum* に総括されている。これらの栽培形態の原形と見なされているのは、「普通の野生バナナ」であって、これは学問的には *paradisaca* の亜種と見なされ、*M. p. seminifera* と称されている。これはインド（ビハル）からマレー群島及びフィリピンまでの間で見出され、台湾（変種 *formosana*）にも存在している。ジャワではこの野生バナナは平地にも出現している。

種子をもっている普通の野生バナナと熱帯地方の本来の果物用並びに野菜用バナナとが種類の上で一致していることから見て、後者のバナナの栽培がこの野生形態の分布限界内の何処かで、従って上述したように、アジアの南部あるいは東南部において起ったに違いはないことは確かである。しかし注意しておかなくてはならないのは、*Musa paradisaca* が人間の経済にとってその果実が意義をもっている唯一のバナナでないということである。従って *Musa paradisaca* により近い関係にある *Eumusa* の全形態群もまた東南アジアやそれに隣接する島々に故郷をもっていること、並びに食用になる果実を供給する栽培バナナが植物学的にも地理学的にも著しく分離している他の形態群——アフリカにおける亜属 *Ensete* あるいは *Physocaulis*——とは決して近い関係をもっていないことを証明する必要がある。従ってまた個々の場合に果物用栽培バナナが *Musa paradisaca seminifera* から出ているかいないかは問題ではない。帰するところは *Eumusa* 群の一野生形態である。

そこで問題になるのは *M. paradisaca* に属する種子のある一形態である亜種 *M. p. troglodytorum* であって、その果実は美味である。これはインド、セイロン、マラヤ群島に出現し、野象の食物となっている。マラヤ群島では *Musa paradisaca* var. *sapientum* 以外に *Musa acuminata* Colla. が非常に美味な果実を供給している。さらに南部中国

の *Musa Cavendishii* Lamb. も同様な果実を生んでおり、タヒチの *Musa fehi* Vieill. も同様である。これはニューカレドニアにも出現している。また上述のように *Musa corniculata* Lour. (コーチンチャイナ、マラヤ群島) は野菜用バナナとして意義をもっており、*Musa nana* Lour. (コーチンチャイナ) や *Musa discolor* Horan も食用になる果実を供給している。しかし、これらの種類が土人の栽培においてどんな意義をもっているかについては十分に知られていないことが多い。一八二九年に *Musa Cavendishii* がモーリシアス島に初めて移入され、その栽培が大きい意義を得たことが報告されている。 *Musa acuminata* については、全ジャワでは山麓や平地で非常に普通にあるが、野生しているだけで、植えつけられていない。他方 *Musa corniculata* Lour. は一般に *M. acuminata* の変種にすぎないものと見なされているが、これはおそらく栽培形態であるといえる。ニューカレドニアの *Musa discolor* Horan は栽培によって広く分布しているといわれている。

ところで、これらのバナナについて問題になるのは、その栽培である。すでに述べたように、*Eumusa* 群の内部における種類の区別が非常に難しく、栽培バナナとくに *Musa paradisiaca* の形態が非常に多様であるために、この形態に属さないバナナの栽培に関する旅行家の報告はとかく曖昧なものが多い。そしてそれらの形態は大部分バナナという一般概念のうちに入れられている。しかしこれらの、屢々もっぱら野生状態において利用されている種類の経済的使用や世話についての詳細を知ることは、バナナの栽培の起原を探る上においてとくに価値がある。

五 *Eumusa* 種の分布地域におけるバナナの栽培

Eumusa 種の全分布地域においては、バナナ栽培の経済的意義は当然大きい。南部中国ではバナナの地方的交易は非常に盛んであって、河川を利用して他の果物や野菜と一緒に運ばれている。ここではその花はサラダとして利用さ

れている。安南の西南部、上部ビルマ、アッサムではバナナは土人によって栽培され、インドシナでも一般にその栽培が見られる。

インドではヒマラヤが集約的バナナ栽培の北限であって、ガンジス河水源からこの限界は西南に向って、湿潤な熱帯的東南部を乾燥した熱いインドの西北部から分離しているアラワリ山脈の東斜面を越えて、大体ボンベイにまで及び、その山脈の周辺並びに西方のガト山脈の斜面は繁茂したバナナの木によって蔽われている。とくにカウエリ河の三角洲ではバナナの木が目立っている。同様セイロンでもバナナは至るところで植えられており、その果実は市場や店屋では大きい役割を果たしている。このことは全マラヤ群島についても同様であって、セイロンにおけると同様にピサン（バナナのマラヤ名）は米やカカオと共に住民のすべての食物の基礎になっている。ジャワではバナナは平地や山地の至るところで栽培されており、沿岸地方では群になって土人の小屋の傍らに植えつけられている。スマトラ人にとってはバナナは重要な食料の一つである。フィリッピンの土着民の食料においてもバナナは目立った役割を果たしている。メラネシヤ群島においてもバナナは住民の農耕生活にとって大きい意義をもっていて、ヤマイモの一種であるダイジョやバナナの畑は女子によって耕やされ、収穫されて、男子はココヤシの栽培の世話をしている。

ニューギニアではバナナは、土地を穴掘棒で耕した後長い苗床にして植えつけられている。ニューカレドニアではバナナはタロー芋、ダイジョなどと共に土人の主要食料の一つである。マリアナ諸島では一種の果物用バナナと六種の野菜用バナナが報告されている。フィジー諸島でも三〇種のバナナが知られていて、これらは土人によって神聖視されている。それはハワイでも同じであって、土人たちは山峽にあるバナナの神苑を大切にしていたが、ここではこの植物は海岸におけるよりも繁茂している。ポリネシヤの西方の島々の土人にとってはバナナはより以上に経済的に大きい意義をもっていて、パンノキ、ココヤシと共に太平洋の三大常食植物をなしている。サモアの土人にとって

もバナナは最高の価値をもっていて、十八世紀末にクックがトンガ島やタヒチ島に到着したときには、彼の一行は酋長からバナナを贈られたり、バナナが交易されたりした。ダーウィンもタヒチ島のバナナの繁茂していることを挙げている。しかしそれから東方に行くに従いバナナの意義は減じている。このことは東方地域がバナナの原始的栽培と関係のないことを暗示している。

六 バナナの栽培の起原

オーストラリアの三種の野生バナナの分布地域においてのみ、原住民の耕作では、バナナは何ら特別の意義をもっていない。このことは最も未開とされていた原始オーストラリア人が周辺のメラネシヤ人の影響を受けなかったことから考えると、当然のことであるように思われる。従って一種にしろ、多くの種にしろ、バナナが何処で栽培されるにいたったかを考えるにあたっては、オーストラリア以外の野生バナナの分布地域を考慮しなくてはならないであろう。元来 *Eumusa* 種は、花粉が蜜を吸う小鳥によって伝達されるように花を次第に順応させながら——原始的な状態に止まった *Physocaulis* 種（アフリカの形態群）にはこの順応がなかった——同時に、柔かくて食べる、そして多くの場合に味が非常によく、比較的小さい種子のある果実をもった果肉を形成したのである。この点に、その果実と種子が栄養を必要とするもっと大きい動物によって分布されることに順応した根拠がある。これらの動物の中には、人間の祖先である猿の外に原始時代の人間もまた加わっていたことは確かである。従って、この人間がやがて特にその種子が小さいか、場所によっては一部分は全くその種子のないある一定の変種の方を選ぶことを知るに至ったと想定しても差支えない。これはまたダーウィンのいう「自然淘汰」である。そしてその結果は種子の少ないバナナの形態が形成され、分布され、ついには全く種子のないバナナの形態が発生するに至ったのであろう。

この場合種子のない果実ができると共に栽培バナナ自体が生れたということは問題ではないが、他方果実の種子が徹底的になくなるとともに、その果実を輸送しそしてそれを第二の場所で食い尽してしまえばこの植物が偶然的に分布されるということははや不可能になる。ところがさきに述べた「自然淘汰」によるこの植物の完成はそれとともに、その目的を達したのであって、今度はその代りに人間の意識的な行為が働き、それと共にバナナの「栽培」が始まるのである。

さて、すでに暗示しておいたように、栽培バナナの種子のないことは、バナナ栽培の年代が非常に古く、遙かに先史時代に遡っていることの証拠である。このことは否定できないが、野生バナナ自体が無種子性への傾向をもっていることも種子のない全く価値のある果実を栽培する出発点として不可欠な前提である。

十分に成熟していてもしかも種子のない果実が出現することは、*Eumusa* 亜属の代表物の間では *Musa paradisiaca* や *Musa Cavendishi* の外に *Musa nana* Lour. *Musa fehi* Vieill. についても知られていて、これらの群についても最初から無種子性への傾向のあったことが想定される。ところで野生形態の未発達の受精しない果実を栽培によって改良し、その果実が無種子性によって使用価値の点で種子のある野生果実を凌ぐぐらいにまで至らしめることが、人間の課題であった。

Musa fehi についてはタヒチの森林のなかに生育しているものは、海拔一、〇〇〇メートルまでのところでは一般に種子がなく、それ以上一、二〇〇メートルまでのところでは種子をもっているといわれている。この場合、前者の種子なしバナナの出現に関して、この低地にいたポリネシアの土人が意識的あるいは無意識的に影響を与えたかどうかは、明らかではない。ところで、植物の世界においては、果実や種子によって繁殖したり、分布したりすることが困難であったり、あるいは不可能であっても、植物的に繁殖する仕方が現われることは、屢々ある現象であるから

Eumusa における側枝の形成を（繁殖能力のない）種子のない果実を生ずる傾向と関係づけなくてもよい。だが旅行家の報告によると、普通の状態では側枝がつかない *Physocaulis* 類（アフリカの形態群）の場合には、開花の前にその花梗をとり去ると、かかる側枝を生ずることがあり、またアフリカの一地域では、*Musa Ensete* は明らかに適してない気候状態の下で稀にしか開花しない、従って決して果実を生じないが、根枝によって繁殖が行なわれているということである。

従って *Eumusa* における種子の減少（*Physocaulis* とは反対に）と共に、同時に側枝を生ずる能力が形成されるということは、確かであると見なしとよい。この場合種子が減少することは、*Eumusa* 類の小さい種子が生存のためのあらゆる困難との闘争において胚種に十分な栄養組織を供給する大きい種ほど絶対的に繁殖を保證することが出来ない限り、いえるといつてよい。このことと上述した *Eumusa* の果実の順応について述べた事柄は矛盾するものではない。すなわち、前者の場合には、その植物の伝播が期待され、後者の場合には発芽の確保、いいかえると必要な場合に胚種としてすでに伝播された植物の幼年期の保護が効果として期待されるからである。

ところで、人間は、美味な果実を供給してくれるものとして認めていたこの種子なし（あるいは種子の乏しい）バナナを、彼の原始的祖先が猿やその他の動物がやったのと同様に、無意識にそして全く偶然に、この植物を食ってその種子を口から吐き出すことによって分布させる代りに、根枝によって移植する方法を最初どうして知るに至ったのであろうか。この問題について考えられることは、人間は自由意志で、あるいはやむを得ず住居の場所を替えるさいに、若干のバナナの野生の木をひきずって行って、新しい住居の場所でさらに生長させるようにさせたが、その際に当然最も運びやすい一番小さいバナナの木、もっと詳しくいえば根枝あるいは側枝を持って行ったものと想定される。かくして若いバナナの木（側枝、根枝）が一つの個所から他の個所へ移され、それとともに人間によって栽培されるよ

うになった、ということである。そしておそらくその際にこの天与の美味な食料を与えてくれるバナナは、原始人たちによって尊重され、ときには神聖視されたことは、ポリネシア人がバナナの神苑を大切にしていたことからわかる。

ともかく果実とバナナの木あるいはまた若い根枝との間の関係は直接観察されたが、種子と果実を結ぶ灌木との間の関係はそんなに早く発見されなかったから、原始の手鋤耕作者には前者の関係の方が後者の関係よりも遙かにより早く気付かれたに違いない。後者の関係を知るとは、種子から生長するこの植物が多かれ少なかれその種類の原型に退化するのが常である一方、挿木は、周知のように、その種類の繁殖をより一層確実にすることが出来るだけに、それだけ容易でなかったに違いない。従って原始人にとっては最大の注意を払いどんなに知恵をはたらかしても、種子から生長した果実のなる植物が自分たちによって好まれた種類であるということ再認識することは、たとえこの原始人が当該の個所にかつて同じ種類の種子を蒔いたことを思い出したとしても、屢々全く不可能であったに違いない。

以上のことからして、手鋤耕作の経営による栽培植物の非常に多くのものが今日でもまだ挿木あるいは^{とりき}圧枝によって繁殖されていることは、決して偶然ではない。例えば、イモノキ、サトイモ、サツマイモの如き塊茎あるいは塊球植物、果樹ではアナナス、バナナ、パンノキ、タコノキの如きは挿木あるいは種芋を用いて繁殖されている。おそらく原始の手鋤耕作者は、徐々に挿木栽培を経ている間に、種子と果実を生む植物の木との間の関係を悟るにいたったが、それまでには少しは時間がかかったであろう。そしてまた手鋤耕作によるその他の植物や、穀類もまた同様に最初は、今日ではまだサトウキビの場合に行なわれているように、挿木によって繁殖されたのであろう。ともかく、手鋤耕作においては穀類もまた一般に地上に種蒔をされないで、態々そのためにつくられた穴のなかにおかれる、すな

わち、植えつけられるということは注目に値するであろう。

七 バナナ栽培の発生地域以外におけるその分布。アフリカ、アメリカ

上述において果実用バナナの栽培をその発生地域に遡って究明したが、しかしそれによっては、この植物を最初に栽培し、それと共におそらくは手鋤耕作の発明者であったと思われる人間がどんな種族に属していたかは、判明しない。栽培バナナの故郷の地域では、最も多様な仕方でも文化的にも肉体的にも相互に影響しあい、多かれ少なかれ入り混っている人間の型が世界中でも稀なほど多数見かけられる。従ってこの地域で人類の伝播と人種分裂が最初に起ったという印象をうける。従ってこの点においてもバナナがパラダイスの木と呼ばれていたことの正しいことがわかるように思われる。

栽培バナナがその野生形態の故郷の地域を越えて分布するにあたっては、今日でもまだそこに土着している人種のうちでもかく小黒人種（パプア人及び小黒人を含むメラネシア人）がこれに目立って参加していたことは確かである。栽培バナナをアフリカに移したのは彼らであった。この事情を探ぐれば、その移された年代や種子なしの栽培バナナがすでにつくられ、そして少なくともそれと共に熱帯地方の手鋤耕作の基礎がつけられた年代の見当をつけることが出来る。

暗黒大陸と呼ばれたアフリカ外における小黒人種の人口要素の分布は、野生の *Eumusa* 類の範囲、従ってバナナ栽培の発生した地域あるいはその近隣の範囲に限られている。彼らは、たとえ一般に純種的ではなくとも、かなり封鎖的な地方を形成しながら、ニューギニア、さらに散在的には、フィリッピン、マラッカ、アンダマン、ミクロネシア諸島などにいる。

今日では、東アジア・オセアニアの小黒人種（黒い肌の、ちぢれ毛の人間）がアフリカの「ネグロ」とその源を一にしているということに多くの学者の意見が一致している。フローベニウスらは、人類学的調査を基礎にして、アフリカのネグロの物質的文化所有物の大部分がアジアに源を發していることを結論した。栽培植物や家畜についてもアジアとの同様な関係が証明されている。一方それに反してフリッツュは、問題の種族の肉体的形質に基づいて、ちぢれ毛のこの種族がアフリカに源を發していると推定している。ところで移動し易い物質的所有物の移動が相反する二つの方向のうちのいずれをとったかということを証明することは一般に困難である。この場合にとくに重要な意義をもっているのは、栽培植物や家畜の原始故郷の確定であって、これらのうちでバナナがこの場合に関心の対象となる。

今日アフリカのネグロの農業経営においてバナナにとって気候的に有利なすべての場所で見かけられる栽培バナナが、アフリカ自体においてはじめて栽培されたものではないことは、すでにその野生の原形の故郷についての調査のさいに確定しておいた。そしてこの故郷は東南アジアやそれに隣接する島々にあるから、必然的に栽培バナナもまたかつてこれらの国々の何処かの栽培地からアフリカへ齎らされたに違いない。アフリカにおける小黒人種の人口要素（黒い肌のちぢれ毛の人間）が今日バナナ以外に所有しているその他の文化所有物の多くのものから見てもバナナがアフリカへの植民とともに、小黒人種を通じて東アジアあるいはその近隣における原始故郷から西南方にかけての西方への道を経て、アフリカに達したことは疑いなく思われる。東南アジアや南海のメラネシヤ種族やその近親種族は肉体的にアフリカの小黒人種（ネグロ）と、またパプアの文化圏は所謂「西アフリカの」文化圏とそれぞれ似ている。従ってこれらの民族が一つの地点から共通に出ていることは十分に考えられる。この一つの地点は東南アジアの諸群島において大体見られるといってよい。そしてこの地点は普通の野生バナナの故郷にあたる地域と一致するであろう。

ところで、この黒い肌のちぢれ毛の種族がこの東南アジアから東方と西方との両方へ、分布しあるいは他のより強力な種族によって押しやられることによって、彼らから東方ではパプア人とメラネシア人が生じ、一方彼らは西方に向っては今日のスダン人やバンツール人の祖先並びに農耕の最初の荷い手としてアフリカ本土に達したのである。後者の人種が雨成期（ヨーロッパの水河時代）の終る前にすでにアフリカに到来していたことは、栽培バナナがそのころにそこへ移されていたことから見ても十分にあり得ることである。

バナナは明らかに湿潤を好む植物であって、乾燥地帯では生育し続けることが出来ない。従って種子のないそして枝根によってのみ繁殖されるこの植物の栽培が、アジアから東北アフリカのここに考えられている地域やその東方に接する西部アジアの地域へ徐々に移入されたことは、これらの地域の今日の気候状態では全く考えられないものと見なさなくてはならない。この理由からしてバナナの栽培の移入やそれと共に農耕の開始は現在の気候期の始まる前、即ちより大なる湿潤と降雨の時代、少なくともアフリカ・アジアの雨成期の終り頃に行なわれたに違いない。

このことは、アフリカの雨成期の終り頃に相当する氷河期、従ってヨーロッパの旧石器時代の終り頃にヨーロッパで規則正しい農耕が始まっていたことを証明することができないことから考えると、バナナの栽培が非常に古いことを前提としている。勿論しかし実際はすでに述べたように、バナナの普通の栽培種に種子のないことは、この植物の栽培が比較にならないほど長く続いていたことを証明している。

ところでまたバナナが遙かに後になって、海路を経て南アジアから直接アフリカへ到達したかどうかの可能性を考察しなくてはならないであろう。かような関連において考えられるのは、東方から海洋を経てマダガスカルに定着し今日でもそこで封鎖的な共同体をつくって生活しているマラヤ民族である。彼らはそこからさらにアフリカの大陸沿岸に達したが、勿論そこでは物質的文化財においてのみその痕跡を保っているにすぎない。だがその影響は東アフリ

カ沿岸では狭い地帯に限られていて、その範囲はアフリカにおけるバナナ栽培の分布と決して一致していない。他方この栽培バナナの分布は、この植物がアフリカの最古の文化的影響と関係のあったことを物語っている。

当時バナナと一緒に、サトイモ *Colocasia antiquorum* Schott. もまたアフリカに到来したといつてよい。事実バナナについてと同じことがサトイモについてもいえる。サトイモはバナナと同じくらい土地と空気との湿潤性を要求し、同様に挿木によって繁殖される。その原始故郷は同様に東南アジアに求められる。*Colocasia* 属並びにそれに近くて、サトイモに似たより多くの栽培植物を与えている *Alcacia* 属 (*A. macrorhiza* Schott. *A. odora* C. Koch *A. indica* Schott.) は、その二五乃至三〇の種類とともにコーチン・チャイナやマラヤ地域を含めた全東部インドに限られている。さらにその上に第三の関連要素として、ニワトリ (*Gallus ferrugineus* Gml. バンキヴァ・ニワトリ) もまた大体同じ故郷 (インド、インドシナ、スマトラ) からアフリカの手鋤耕作的経営のなかへ、最初から一緒に移し入れられたのである。ニワトリがアフリカに起原をもっていないことは証明されている。

ところで、バナナが小黒人種によってアフリカに移入されたのは第三紀の終り頃あるいは洪積世 (雨成期) の始めごろであるという説がある。それに関連してヨーロッパにおける小黒人種の痕跡のあるのは、最後の氷河期 (ウエルム) の後期旧石器時代である。これは所謂グリマル人種であつて、彼らはピグミー人やブッシュマン人と共にアフリカの小黒人種のうちのより古いそしてともかくまだ手鋤耕作を営んでいない下層段階を示している。この人種はヨーロッパにおいては洪積世の終り頃にはじめて、他の同様に耕作の痕跡の認められない種族と並んで見受けられる。そしてまたヨーロッパにおいては遙かにより後に、すなわち氷河期が終つてから久しく経つたところに、いわば旧石器時代のあとにつづく中石器時代の終了後、すなわち純新石器時代に始めて、規則立つた手鋤耕作経営が始まっている。従つてそれよりも数十万年も早い時期にすでに一民族が、たとえやつと手鋤耕作の最初の段階に立っていたとはいへ、バ

ナナの栽培を伴ってアフリカにやって来た、ということは非常にあり得ないことである。

ともかく、雨成期の終り頃は、アフリカへの最古の手鋤耕作の移入の時期として想定され得るものうちの最も初期にあたるといってよい。その根拠は種子なしバナナが挿木によって栽培されるからである。その場合に前提となっていることは、今日のアフリカ原住民が本質的には陸路を経て徐々に彼らの原始故郷から今日の彼らの居住地へ分布したということである。ネグロはポリネシヤ人のような航海人種であったことを示していない。従って彼らは海路を経て今日の彼らの居住地域に到達したのではない。

最後に熱帯の大きい手鋤耕作地域としてアメリカがある。ここにはしかし一般に *Musa* 属（バナナ）は存在しない。従ってこの地域におけるバナナ栽培の発生の問題は、たとえここにこの植物が土着のものに見なされたとしても、真面目にはとりあげられなかった。ところがこれに対して、アメリカが発見される以前にすでにそこではバナナは土人の原始的な農耕経営と一体になっていた。従ってコロンブス以前の時代にバナナは東半球の原始民族によって齎らされたものである、ということが屢々想定された。とくにアレキサンデル・フォン・フンボルトがこの見解を代表し、オリノコ、カシキアレ、ベニの諸河畔あるいはエスメラルダの山地、カロニ河畔の深い森林においては、殆んどいたるところにおいてヨーロッパ人の植民地と何ら関係のないインディアンにおいてバナナが見かけられることを指摘した。彼は、コロンブスや彼の後継者たるピンソン、ヴェスプチ、コルテズなどがこの植物を全然あげていないことを認めているが、これに反してガルシラソ・デ・ラ・ヴェガ（一五三〇—一五六八）がインカ帝国の住民の食物の中にバナナをも挙げていることを引用している。この見解に対して、ドゥ・カンドルはガルシラソの報告を十分に信用のできるものとは見なさないで、スペイン人がバナナをプラネと呼んでいるが、この言葉はインディアンの言葉から借りたものでない、というヨセフ・アコスタの報告を引用している。

アコスタによると、インディアンはバナナをスペイン語のドミニクという名で呼んでいた。これはドウ・カンドルがいつているように、バナナが新大陸発見後まもなくスペイン人やポルトガル人によってセント・ドミンゴ島に移入されたために、その移入地の名前がバナナに移されたと思われる。またブラジル語ではバナナの名としてパコバ、パコバがあげられているが、これと関連のあるパコヴェという名はギアナにおけるフランス人が元来用いていた名であり、その語原はインドのマニパール語のバナナの名であるバラ、パランであり、おそらくポルトガル人がこれを新大陸へ伝えたものであろう。そしてその最も古い語形は、前述のようにサンスクリット語のパラに遡っている。従って新世界におけるバナナの名称は旧世界におけるバナナの名称から系統をひいてると考えられる。ともかくバナナは非常に価値のある食料であったから、それだけに非常に急速に伝播したことは事実であって、その結果その名称も早くひろまったようである。

しかしもし一部の学者のいうように、新大陸発見前にバナナがすでにそこで栽培されていたことが事実であると仮定すると、海流によってバナナの木がアジアにおけるその故郷から、あるいはアフリカからアメリカへ押し流されて来たということも考えられる。しかしこのことは、栽培バナナの種子がないことからしても考えられないことである。

次に考えられることは、すでに先史時代に旧世界と新世界との間に交通のあったという想定である。かつてクンツエによって、バナナはサンドウィッチ島（ハワイ）から航海民族によって熱帯アメリカへ移入されたということが主張された。もしそうだとすれば、ポリネシア人の側から栽培植物がこのように意図的に移入されたさいに、ポリネシアと熱帯アメリカにおいて手鋤農耕によるバナナ以外の植物の種類が同じでない、ということとは奇異な感じがする。そのうちの重要なものを若干あげるならば、ポリネシアの最東端の島では栽培植物に関してはサトウキビ、バナナ、カジキ (*Broussonetia papyrifera*)、アルテア (*Thespesia populneus*)、キョウオウ (*Curcuma longa*)、ヒョータン、

Arum 類〔サトイモ類 (*Colocassia*) やおそろくワズイモ類 (*Allocasia*)〕、ヤマノイモ類が存在している。一方中央ブラジルの未だ文明に接しないインディアンの間では、トウモロコシ、イモノキ、タバコ、カボチャ、ヤマノイモ類、サツマイモが手鋤耕作によってつくられている。後者の植物群は明らかにアメリカ起原のものであり、前者は旧世界の原形に属している。そのうちカボチャはアメリカにおいてその野生形態 (*Crescentia cucurbitana*, その故郷は中央アメリカ) から出たものであり、その果実は旧世界におけるヒョータン類 (*Lagenaria vulgaris* その故郷はインドその他) と同様に利用されている。問題は両地域で栽培されているヤマノイモ類とサツマイモ類である。普通のヤマノイモは、*Dioscorea Batatas* であって、これは東部アジアの原産である。その他に東半球ではさらにダイジヨ (*Dioscorea alata* 東インド並びに南海諸島で栽培されている)、カシュウイモ (*D. sativa*, 南部アジア)、ヤマノイモの一種 (*D. dumetorum*, 東部アフリカ)、ヤマノイモ (*D. japonica*, 日本) が利用されている一方、アメリカについてはギアナのヤマノイモの一種 (*D. triloba*) がおそらくアメリカで栽培されているヤマノイモ類の原形であるといつてよい。サツマイモやタバコはアメリカ原産であることは確かであって、しかもその栽培はヨーロッパ人の渡来以前から始まっていた。従つてアジアの南部の人間がもしヨーロッパ人よりも早くアメリカと交通していたのであれば、彼らは少なくともサツマイモやタバコを早くから旧世界にもたらしていたであろう。ましてや熱帯地方の住民にとって特に重要な食物とされている栽培バナナの如きは最も容易に新世界の旧住民に迎えられていたであろう。ところが事実において発見以前に新旧両世界の間にかかる栽培植物の交換のなかった以上、アメリカの熱帯地域の手鋤耕作が栽培バナナをアジアあるいはオセアニアまたはアフリカから受け入れたということは考えられない。

その反面にバナナがすでに一五一六年にトロソ・デ・ペルロンガによってカナリー島から西インド諸島に移入されさらに十六世紀の中葉にギネアのセント・トーマ島からブラジルに移されたことは確実である。そして今日ではバナ

ナはインディアンの栽培の下に熱帯アメリカにおいてひろく分布している。それは、ヨーロッパ人によって初めて旧世界に齎あづからされたイモノキやトウモロコシがアフリカやその他の熱帯、亜熱帯の地方で盛んに栽培されているのと同様である。とくにバナナは現在アメリカでは交易の主要な対象になっている。その大規模な栽培の世界的中心は、ホンジュラス、ニカラグア、グワテマラ、コスタリカ、パナマ、西インド諸島であり、ことにジャマイカ、ハワイ諸島、タヒチ、カナリー諸島である。

以上のことを総括すれば、バナナ (*Musa*) 類のうちのアフリカ形態群 (*Physocaulis*) はアジア形態群 (*Eumusa*) とは根本的に相違している。従って前者は栽培されている果実用バナナの原形群としては問題にならない。そして果実用栽培バナナはむしろ *Eumusa* 群のうちの一種あるいは数種から出たものである。従って *Eumusa* 類の占めている地域はバナナ栽培の起った地域を包含している。この植物の栽培の始まったのは、その果実の無種子性への傾向と根源的に関連し、従ってこの植物は根枝によって繁殖されることによって栽培されるようになった。

バナナは、小黒人種の人口要素によってアフリカへそこにおける手鋤耕作による栽培の始まりとともに齎あづからされ、彼らは東南アジア並びにオセアニアの小黒人種の系統をひいている。そしてこの果樹はアメリカ発見後初めてヨーロッパ人によってそこへ達した。

八 バナナの栽培と世界における農耕の起原

上述においてわれわれは、バナナの栽培が東南アジアに起り、小黒人種の人口要素によって洪積世、すなわち氷河期の終り頃にアフリカに齎あづからされ、同時にそれがアフリカにおける最古の手鋤耕作の最も初期にあたることを明らかにした。そこでこのアフリカにおける最古の農耕がいわゆる小麦、大麦を基礎にした世界的農耕の起原といかなる関

係にあるかを明らかにしたい。これが本稿の目的でもある。

最後の氷河期（ウエールム）には北半球の大半は氷河に蔽われていたが、その期の終り頃になって氷河が今日の高山にその痕跡を残しつつ北に退くに従い、現在の北アフリカ並びに地中海沿岸地方、西部アジアの一角は大降雨期に入り、至るところで高所から低地に向って大きい水の流れや大瀑布が現出し、気候は極めて湿潤であった。無論そこには人間はもとより動物の住む可能性はほとんどなかった。そしてその影響をうけてアフリカの赤道附近の地帯も大降雨によって絶えず見舞われていた。大西洋から吹く大暴風雨や強い西南風が北アフリカの沿岸地方やそれに隣接するアジアの地域の気候を支配し、現在のサハラ砂漠も当時は今日の地中海沿岸地方と同様の降雨をうけていたのである。

やがて氷河の北方への後退の度が進むに従い、気候地帯もまた眼に見えない程度で北方に移動した。これらの地帯では次第に極寒の気候がやわらぎはじめ、その結果人類の遠い祖先は、住みよき気候と食物を求めて北方へと移動を開始した。

一方これらの地帯にあたる前アジア、メソポタミヤ、イランの諸地方は小麦、大麦の生育している地帯であって、現在では世界の最古の農業はこれらの地域で起ったことが想定され、現に世界の学界がこれらの地方へ調査団を派遣してその究明に努めていることは周知の通りである。そしてこれらの地帯が氷河の後退によってその気候的影響から脱するに従い、これらの地帯は大降雨期を終り、次第に地形は固まり、氾濫していた水は小さくは湖水となり、大きくては地中海となり、大なる水の流れはナイル河となり、チグリス・ユーフラテスの二河に吸収されてしまった。そして気候は次第に温暖になり、諸地域では大きい森林も発生し、人間も動物も住み得るようになった。そこには狩猟の対象として適当なライオン、野牛、大鹿、縞馬その他の動物がせいそくし、採取に都合のよい野生の植物にも欠けてはいなかったからである。

だがこれらの地帯はやがて乾燥しはじめた。それと同時に大きい森は次第に消滅し、その代りに広い草原が支配的になってきた。そしてそれに伴って大森林にせいそくしていた動物や暑さを好む動物は南下してアフリカの森林地帯へ退いた。おそらくその時代はすでに氷河時代、すなわち旧石器時代を經過して中石器時代に入っていたときであつて、人間はまだ採取経済の段階に終始して、植物を栽培したり、家畜を飼育したりするまでには行っていない。おそらく当時小麦や大麦の野生種は現在それらの分布している地域よりももっと南方、特にアフリカの北岸地方にひろく分布していたに違いない。そしてこれらの地域の原住民は石鎌でこれらの野生の小麦や大麦の穂をきりとりあるいは石製の鋤を用いて食用になる根を掘り起こしていたのである。この段階における人類文化の痕跡を示しているのは、パレスチナのカルメル山の洞穴に住んでいたナトゥフイアン人である。彼らは土器、石斧、家畜をもっていなかった。彼らの遺物の堆積の大きさによって彼らが比較的長い間定住していたことがわかるにもかかわらず、栽培と飼育によるいわゆる生産経済の段階に達していなかった。従つて彼らには新石器時代の痕跡はない。しかし上述したように石鎌で野生の穀類を採取していた点においては、彼らは穀類に関心をもった人間の最も古い痕跡を示しているといつてよい。彼らが活躍した時代は、その洞穴や遺物による年代的考察に基づいて紀元前一〇、〇〇〇年から同六、〇〇〇年の間と推定されている。

まもなくエジプトのナイル河の流域において最古の農耕が始まった。その最初の痕跡は中部エジプトのナイル河東岸近くにその遺跡の発見されたタシアン人の定住地である。彼らは本質的にまだ狩猟や漁撈によって生活していた放浪人種であつたが、すでに一方ではナイル河の毎年の氾濫を利用して野生植物、例えば小麦や大麦の種子をまいて素朴ながらも農耕を営んでいた。すでに彼らは粗製土器や粗雑な石斧を使用し、穀粒をすりつぶすための石製のすりこぎ器をもっていた。

この段階がさらに進んだものは、ナイル河下流附近のファム人の遺跡であって、彼らは狩猟や漁撈以外にすでに牛、豚、羊（あるいは山羊）を飼育し、エンマー小麦と大麦を栽培し、石鎌でそれらの穀類を収穫し、小高い乾燥した丘の穴のなかにそれらの穀粒を貯蔵し、鞍型の挽臼で穀粒をひき、土器、石斧、石鏃、骨製の銛の先きを使用していた。彼らの遺物や遺蹟こそは、小麦や大麦の栽培のみでなく、牛、豚、羊（山羊）の家畜の飼育の最古の明白な痕跡である。

ファム人に似ているのはナイル河三角洲の西端においてその遺跡が発見されたメリムディアン人であって、彼らはエンマー小麦を栽培し、石鎌を使用し、穴に穀粒を貯え、それを打穀場で打穀し、牛、豚、羊（あるいは山羊）を飼っていた。

以上に述べたタシアン人、ファム人、メリムディアン人は純粹の新石器時代の段階に立っていて、おそらくその最古のものを代表しており、その年代は紀元前六、〇〇〇—五、〇〇〇年と推定されている。彼らの文化はその後乾燥化の進むにつれて、エジプトから消滅したが、彼らのうちで残存したものは他に移住したといつてよく、西ヨーロッパの新石器文化は北アフリカやジブラルタル海峡を経て徐々にエジプトから移住してきたメリムディアン人によってつくられたものであるといわれている。

われわれはここに農耕の最初の段階からその後の発展段階について詳述することを省くが、エジプトやパレスチナ以外に古い農耕文化の痕跡をシリア、メソポタミヤ、インダス溪谷において発見し、さらにそれらの延長としてイラン、バルチスタン並びに北方ではトルキスタンにおいても見出している。カスピ海とペルシャ湾の間にあるシアルクの遺跡は未だエジプトのナトゥフィアン人の文化と同じ採取段階に止まっていたことを示し、その初期の文化はファムの新石器時代文化と似ていて、その年代は大体紀元前四、三〇〇年ごろであるといわれている。そしてまもな

くこの文化は純粹の新石器時代に入っている。シアルクの初期の時代と同時代にあたる定住地はチグリス河畔のニネヴェやトルキスタンのアナウにおいても存在していた。これらの文化は食物の採取と生産との兩段階の混合したものであつて、スメルやアカドを含むより後の西南アジアの文化の祖先にあたるといつてよい。一方もう一つの非常に古い文明の中心は西北インドにおけるインダス河溪谷とパンジャブにおいて発見されており、南部メソポタミヤを含めてインダス文明の始まりは紀元前三、〇〇〇年以上とされている。そして紀元前三、〇〇〇年ごろにはその文明はエジプトやメソポタミヤの文化と同じく、すでにパン小麦、大麦、綿、シユロ、米を栽培し、牛、水牛、羊、鶏、象を飼つていた。おそらく上述したエジプトから西部アジア一帯に及んだ農耕は夫々独立に、多少とも同時に起つたとは考えられない。むしろそれらは何処か一つの原始的中心からひろまった結果であるが、ただその中心が何処にあつたかということは決定が困難である。そのために現在世界各国の調査団が競つてこれらの地方を探險発掘している。

今これらのことを考慮に入れながらこの最古の農耕とすでに氷河期の終りごろに東南アジアからアフリカの東部にひろがつていたバナナ栽培との連関を考へてみることは一つの意義をもっている。すでに述べたように、バナナの果実に種子のないことは、バナナの栽培が非常に古いことを暗示しており、しかもバナナの無種子性は栽培の結果得られた特性であり、その特性は近代において獲得されたものではなく、すでに原始の時代に、すなわちその伝播のはじまる前に人間によつてつくり出されていたのである。野生バナナが全く無種子でない以上無論その特性を得るには非常に長い年月がかかつたに違いないが、現代でも果物の種子をなくすることに文明人が苦勞していることから考えると、バナナの最初の栽培者はすぐれた果樹の栽培家であつたといつてよい。

そこで今問題になるのは、この原始時代のバナナの栽培家であつたアジア南部の小人種とエジプトあるいはパレスチナの最古の農耕人種との間に人種的あるいは文化的に何らかの関連がありはしないかということである。ことに

重要なのはエジプトや西部アジアの最古の文明をきづいた人種がいかなるものであったかということである。これに関連して考えられることは、アフリカの北部に最初に到着したハム族の黒人であって、彼らはエジプトの最古の文明と密接な関連をもっていた。この黒人種は南部からエジプトへ進出したとも想定され、あるいはアジア南部からペルシャ湾を経てエジプトに達したともいわれている。彼らはすでに南部アジアあるいは東部アフリカにおいてバナナを栽培していた黒人の系統である。ただ彼らがエジプトに達したときには、すでに気候の乾燥化しつつあったエジプトではバナナの栽培は困難であった、又たとえ栽培を試みても成功しなかったであろう。しかし野生の植物を栽培することによって食料を生産する観念はもっていたと考えられる。あるいは彼らはそうした栽培の伝説をもっていたかもしれない。それは西部アジアにおいても聖書にあるように、古くからアダムとイヴの楽園とその後えいであるカインとアベルの伝説があり、カインは農耕の開始者であり、アベルは牧畜の開始者とされているのと似ていたであろう。事実すでに述べたようにバナナの果実に関しては、聖書における楽園のリンゴに似た楽園の果物としての伝説がつきまとっている。このことはかかる伝説をもってエジプトに最初到着した黒人のハム人種がそこに野生していた小麦や大麦を栽培するに至った一つの動機となったのではないかと考えられる。このような想定をする一つの根拠は、タシアン並びにファエムの文化においてそれまでに長い間の栽培の経験がなかったにもかかわらず、野生植物である小麦や大麦が何故に突然栽培されるようになったか、ということは上述の想定をもってするより以外に説明の仕方がないからである。

参 考 文 献

- Alphonse de Candolle; *Origine des plantes cultivées*, 1883. 加茂儀一訳 「栽培植物の起原」(岩波文庫)
Ludwig Reinhardt; *Kulturgeschichte der Nutzpflanzen*, 1910.

- Sago : Bull, Soc. bot. fr. XXXIV, 1887.
- K. Schumann ; Musaceae, (E. Engler, Das Pflanzenreich, IV, 1900.)
- J. G. Baker, A synopsis of the genera and species of Musaceae. Ann. of bot. VII, 1893.
- O. Kuntze ; Die Herkunft der in America nur kultivierten Banana. Gartenflora, 1906.
- E. C. Curwen: Plough and Pasture, 1946.
- E, Werth ; Zur Natur-und Kulturgeschichte der Banana, 1917.
- ditto ; Das ostafrikanische Küstenland, 1915.